

2006 年度水産海洋学会・日本海洋学会西南支部・海洋気象学会九州沖縄地域研究集会
「河川、陸域での水循環と海洋環境とのつながりについて」速報

高柳和史（水研セ・西海水研）・石坂丞二（長大・水産）・神谷ひとみ（長崎海台）

標記地域研究集会は、2006 年 12 月 7 日に長崎大学水産学部で行われた。大学および試験研究機関を中心に 58 名が参加した。午前 10 時から午後 4 時 40 分まで基調講演 2 件と研究発表 7 件を行った後、総合討論を行った。

主催者からの挨拶後、コンピナーを代表として高柳（水研セ西海水研）が本研究集会の趣旨説明を行い、午前中に基調講演を 2 題行った。笠井（京大院）から伊勢湾を例に挙げ、湾奥と湾口では基礎生産を支える栄養塩の供給様式が異なることが説明され、東シナ海のように栄養塩が長江、黒潮系中・深層水と 2 つの大きな起源を持つ海域では示唆に富む発表であった。井関（広大院）からは海洋生態系の変化についてシリカ欠損仮説をもとにアイアンゲートダムが建設されたドナウ川、黒海沿岸域を例に挙げながら説明が行われた。今後、長江に建設された三峡ダムの影響で東シナ海でもシリカ欠損による生態系変化が生じるのか注視が必要との問題提起となった。

午後からは一般講演となり最初のセッションは東シナ海に関するものであり、長江起源水の影響に関して 3 件、海面水温に関するもの 1 件の発表があった。中田（長大水産）からは過去 50 年のデータ解析から長江流量の増加傾向と東シナ海北部での塩分低下傾向との相関が示された。また、長江における DIN 濃度増加傾向が東シナ海北部での DIN 濃度分布に影響を及ぼしていることが示唆された。松野（九大応力研）からは対馬海峡周辺での長江起源水の挙動について定置網観測、フェリー観測結果をもとに発表があり、西水道と比較し東水道での変動が大きいことが報告され、2005 年と 2006 年の比較では後者では低塩分が遅く、低塩分水は西水道を中心に広がり、エチゼンクラゲの来遊パターンと符合することが示唆された。佐々木（水研セ西海水研）からは溶存有機物（CDOM）の光学特性を利用して長江起源水の広がりを把握する手法について報告され、長江起源水に含まれる CDOM が季節毎に異なるが、一定条件の下に海色衛星 CDOM データが長江起源の低塩分水の指標となることが示された。笹野（長崎海台）からは気象庁が提供している衛星データから算出した 1/4 度メッシュの海面水温データ MGDSST と沿岸水温実測値との比較から、地上気温で補正することにより MGDSST を沿岸水温の代替として活用できる可能性が示唆された。

2 番目のセッションは沿岸の事象についてであり、3 件の発表があった。松本（水大校）からは鹿児島県吹上浜海岸での地下水湧出と栄養塩濃度の調査結果から、砂浜地下水からの栄養塩供給は汀線付近での付着珪藻等による有機物生産に重要であることが示された。下田（水研セ西海水研）からは石垣島マングローブ汽水域での懸濁物、栄養塩の調査結果から、降雨時にはマングローブ内で一時的に懸濁物、栄養塩等が保持され、降雨終了後徐々に放出される緩衝作用があることが示唆された。田中（水研セ西海水研）からは有明海奥部における透明度、筑後川からの懸濁物質負荷、浮泥、堆積速度の解析結果から、大出水時以外では浮泥の巻き上がりが有明海奥部の透明度に大きく影響を及ぼしていることが示された。

多岐にわたる発表であったが、九州沖縄地域特有の海域における陸域からの物質負荷と海洋環境の応答について情報交換、問題点の共有ができ有意義な研究集会であった。